



活動
理念

「食を通じて地域の方とのコミュニケーションを育み、
障害への理解や共生社会の実現を目指す。」

PROFILE

理事長：白河の町医事で地域とのつながりがある。熊田氏のメンター。
法人常務理事・施設長／熊田芳江 社員／37名・スタッフ／5名

事業概要

- ・地域生活支援センターI型 ・相談支援事業
- ・居宅介護支援（ホームヘルプサービス）
- ・就労移行支援 ・就労継続支援A型 ・就労継続支援B型
- ・共同生活援助（グループホーム）
- ・養鶏 ・直売所 ・カフェ ・食品加工 等

地域の現状

耕作放棄地の増加や農業後継者の不足、荒れていく農村景観などの地域課題と地域で居場所を必要としている障害者の自立を解決したいという思いを共有できる仲間とプロジェクトを立ち上げ、NPOを設立。

農福連携をはじめたきっかけ

障害者の工賃アップ、健康づくり、人間らしい生き方を取り戻すためのリハビリテーションのため。



ここが point!

- 「地域住民と障害者の交流の場づくり」
- 「原資の大切さ、プロとしての矜持」
- 「かつこい仕事の指標として高付加価値化」



沿革(画期区分)

助定期 地域の社会的課題解決に向けNPO法人設立

- 平成14年(2002) NPO法人「こころネットワーク県南」設立
- 平成16年(2004) 「生活支援センターこころん」開所。裏山でしいたけ栽培を開始。
- 平成17年(2005) NPO法人「こころん」に名称変更。ホームヘルプサービス事業開始。

形成期 利用者の就労機会創出を目的とした経営多角化

- 平成18年(2006) 里山再生プロジェクト開始 地域活動支援センターI型
就労移行支援事業 就労継続支援B型事業
共同生活援助事業 居宅介護支援事業 グループホーム「あけぼの荘」事業開始
共同作業所「なごみの家」事業開始 「直売・カフェこころん」開店
- 平成19年(2007) チャレンジショップにこここ屋開店 ジョブコーチ支援事業開始
- 平成20年(2008) グループホーム「こころんはうす」開所
- 平成22年(2010) 「矢部農場」開始(養鶏・採卵)。こころんファームとして無農薬栽培の農業開始。
- 平成23年(2011) 社会福祉法人「こころん」に変更(NPO法人解散)。
「こころん工房」開設(製菓部門) 指定特定相談支援事業開始
就労継続支援A型事業開始

発展期 高付加価値化によるブランディングと就労機会の多様化

- 平成27年(2015) こここ屋の閉店に伴い移動販売を強化
- 平成28年(2016) ディスカバー農山漁村の宝「アクティブ賞」受賞
- 平成30年(2018) こころんファーム養鶏場「ここたま」開所(平飼いへ移行:1,000羽)
JGAP認証取得(青果:たまねぎ、きくいも、スナックエンドウ)
- 令和元年(2019) JGAP認証取得(採卵鶏・鶏卵・飼養加工) ふくしま地産地消大賞「優秀賞」
- 令和2年(2020) JGAP認証追加取得予定(青果:オクラ) 就労定着支援事業開始
ふくしま産業賞受賞・総務省産業賞受賞

■ ころんのマッチングストーリー

「地域住民と障害者の交流の場づくり」

「べてるの家」を参考に、年に1回、当事者の会を開催し、その後はお祭やアートフェスによって地域住民と障害者の交流を図る。地域課題解決のために事業所の必要性を感じ、NPO法人設立準備開始。設立にあたってネーミングを公募し、「ころん」に決定。農家への施設外就労やしいたけ栽培から農福を開始。やがて、直売所やカフェを開設することとなる。

直売所・カフェは洗練された木造建築、熊田氏の女性らしく細やかなセンスが感じられる。直売所建設当時は事業資金獲得に苦慮し、コストダウンのために壁や床材を減らすデザインとした。

「原資の大切さ、プロとしての矜持」

「お金に怖い人だ」と陰口を言われることもあったが、地域や障害者のためだと諦めずにイベントを数多く開催し、ころんの認知度を高めることで寄付金を集め、毎年2000万程度の補助金・助成金を獲得した。職員や利用者に「プロ」意識が芽生えるよう、農業・製菓・料理など各部門毎に専門性を高めるよう指導してきた。

「かっこいい仕事の指標として高付加価値化」

GAP認証に取り組んだのは、利用者・スタッフに惨めな仕事をさせたくないから。誰もが自信を持ってかっこいいと言える仕事の指標としてGAPを取得。認定農業者になっても周囲の理解が得られない時期があったが、福島県の理解と協力で、村の福祉課・農政課・地域振興課の協力も得られるようになった。

熊田氏は自分のやり方を参考にして農福連携で地域に「福」が広がるようにと願って、現在は日本農福連携協会などで精力的に活動を行なっている。

■ ころんのマッチングポイント！

1 マッチングの形態

6次産業化の取組として、農業部門で収穫した鶏卵や農産物をカフェメニューや製菓加工品として付加価値向上を図り、直売所・カフェ・移動販売車で消費者と繋がる仕組みで、障害者が適性にマッチした仕事に取り組めるシステムを構築。利用者それぞれの適性と当日の体調を考慮した配置を行い、就労に必要な体力、精神力、忍耐力、チームワークを養っている。

2 その発展過程

熊田氏の元銀行員の経験を活かし、助成金・補助金と銀行からの借り入れを組み合わせることで、事業規模を拡大。→「ころん」が地域住民にとって「ほっとする」「癒やしの場」という評価を得られ、近隣農家や生産者が商品を販売することで取り扱い商品も多種多様になり、コミュニティカフェとしての役割が定着。→直売所・養鶏・畑作・菓子製造・移動販売など労務多様化を実現。

3 行政による財政的・人的支援

福島県事業「みんなで農業体験!農地活用推進事業」、福島県農林事務所・有機農業推進室の指導を受けて、米・玉ねぎ・オクラなどの作付けを増やす。泉崎村ふるさと納税返礼品にころんの商品が選ばれた。

4 農業関係団体・福祉関係団体との連携形態

直売所を通じて、地域農家とつながり、地域農業の担い手に成長。利用者が出勤できない早朝の作業には、「サポートスタッフ」として地域の高齢者に活躍してもらっている。地域の休耕田・休耕畑を借用。農業機械譲渡。



5 マッチングの対象

品 目：養鶏・水稲・直売所・カフェ 等

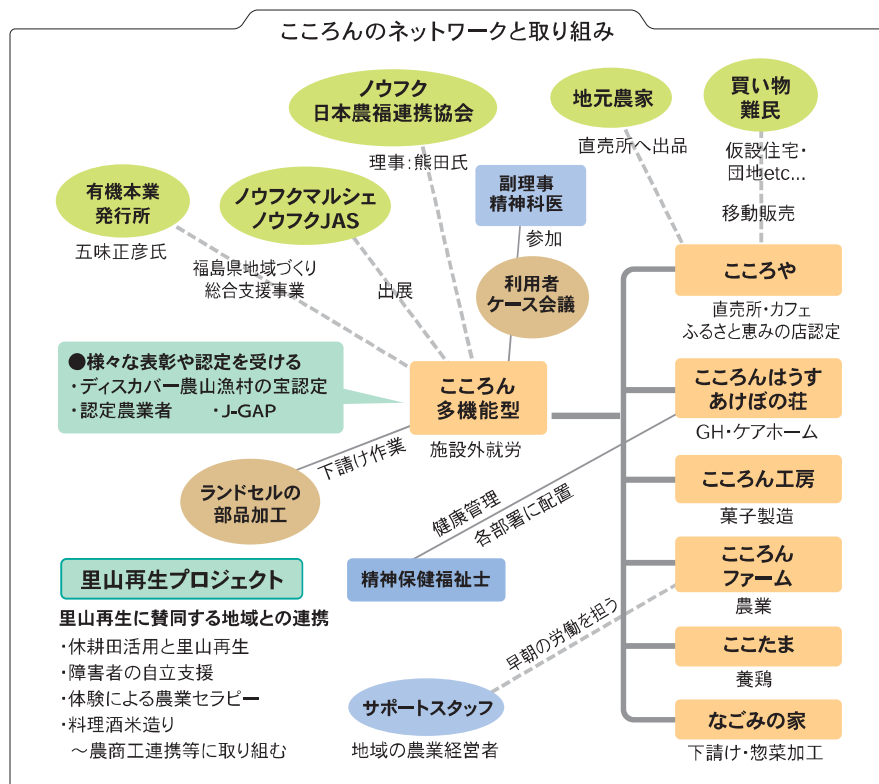
利用者：精神障害

・JGAP認証を取得するために、作業環境を整え、作業の効率化を図ったことで、障害者にとっても働きやすい環境が整備された。



6 コーディネーターの育成方法

・有機農業の経験者を雇用。・利用者に精神障害者が多いため、精神疾患特有の症状に対処できるよう各事業所に精神保健福祉士を配置。農作業においては気候、労働強度や時間などを考慮し、利用者の負担を和らげる工夫と一緒に労働するチーム作りに配慮。・法人の副理事長が精神科医でもあり、医師を交えた利用者支援を行うことで利用者が長く働き続けられるような体制を整えている。・所長会議により定期的かつ横断的に情報共有。売上アップ検討会・工賃アッププロジェクト・新商品開発・パンフレット制作など、職員の自主的かつ積極的参加を促して「部門間の連携」を重視している。



参考文献

- ・日本農福連携協会資料 戸山サンライズ 2017 年秋 特集「農福連携」
- ・平成 30 年度農福連携における実態把握に向けた調査検討委託事業 調査報告書
- ・平成 31 年 3 月 25 日三菱 UFJ R&C 株式会社
- ・農福連携技術支援者育成研修テキスト Ver.1 令和 2 年 9 月 農林水産省
- ・座学⑨ 障がい福祉サービス事業の運営の実務